修士論文概要

パキスタン（旧）北方地域における、初等教育未修了問題の諸要因と、打開策

Factors inhibiting primary age children completing school and recommendations for improvement

督永　忠子

研究の目的と方法

本論文ではパキスタンの最北地、ＧＢ州における初等教育未修了問題の諸要因を追求し、身近で可能な取り組み（打開策）を述べ、初等教育の就学率と未修了問題の底上げに寄与することにある。

パキスタンではイスラーム過激派によるテロが頻発し 2009 年の犠牲者総数は 11704 人、2010～2015 年の犠牲者総数は概ね年間 6000 人平均であった。筆者はパキスタンでの暮らしが 35 年以上にもなり、日々、テロのニュースにまみれている。そうした中で 30 年も女性の自立支援や、子供たちがもっとも躓きやすい算数教室などで関わって来たＧＢ州辺境地域では、貧しい家庭の子供たちが神学校に行くことで、時としてテロ（武装勢力）の担い手になるケースがあることを見聞きしている。パキスタン国内には神学校が 1 万 3405 校あり神学生の総数は 180 万人もいるが、一桁の足し算すら出来ない生徒も珍しくはなく、その学力は極めて低く、多くの神学校生徒や初等教育も修了出来ない子供たちには、就業の機会や将来的な展望はない。筆者はそのような子供たちが武装勢力に身を投じることを懸念し、初等教育の改善を模索していた。そして現地へ足を運びその実態を調査・比較している過程で、初等教育を阻むものへの関心が深まった。

初等教育の修了を阻む要因は多面にわたる。そこで、それらの実態把握のために、パキスタンの教育制度や中央政府およびＧＢ州の教育政策、参考になりそうな地域に関連する先行研究などを政府サイトなどで調べ、さらには政府とＧＢ州独自が発行している教育実績データなどを比較・検討した。また、神学校と公・私立学校の生徒たちだけではなく、一部教員たちにも生徒と同じ学力テストに協力をして貰った。さらには筆者が主催している算数の補修教室でも算数・ウルドゥー語のテストを実施、その結果を見るなどで教育現場の把握につとめた。その上でギルギットおよび近県の行政・教育関係者、神学校の導師や神学生徒たち、その家族や教員たちから、地域の概

況や生活習慣、教育に関する問題点等を単なる外国人としてではなく、イスラーム教徒として日常会話の延長で話し込むことを通じて、本音を聞き出すことに努めた。その結果、住民自身がどのような経済的・社会的・宗教的背景で初等教育に向き合っているのかを整理し、初等教育を阻む要因をあぶり出し、妥当な打開策を検討した。

論文の構成

第１章　はじめに
1.1　研究の背景と目的
1.2　調査対象の選択と概要
第２章　パキスタンと（旧）北方地域について
2.1　パキスタンの概観
2.2　（旧）北方地域の歴史
2.3　ＧＢ州の地形と特質、自然環境
2.4　ＧＢ州を構成する民族と宗派
第３章　パキスタンの教育における現状と課題
3.1　パキスタンの教育制度
3.2　パキスタンの公立学校と私立学校
3.3　ノンフォーマル教育（コミュニティ・スクール）
3.4　イスラーム神学校(マドラッサ)と武装勢力
3.5　初等教育を受け持つ教員たち
3.6　パキスタンにおける初等教育、就学率の変化
3.7　パキスタンにおける初等教育、就学率の低迷
3.8　パキスタンにおける国家教育予算
3.9　パキスタン（県）別、教育ランキング
第４章　ＧＢ州の教育現状
4.1　ＧＢ州の就学率
4.2　ＧＢ州の教員たち
4.3　イスマーイール派の共同体と、教育に対する取り組み
4.4　カラコルム国際大学の開設に伴う、女子教育の変化
第５章　子供たちが初等教育を修了出来ない要因
5.1　過疎・山村では現金収入の機会に恵まれない（制服などが購入出来ない）
5.2　学校や教員の不在。ゴースト・スクールやゴースト・ティチャー問題
5.3　イスラーム厳格主義的な傾向と、根強い家父長制が自由な発想を抑圧する
5.4　女生徒には、発育の過程で就学の継続に不可の山場がある

5.5　多言語国家ゆえに制約が大きい。母語で学べない民族は国語力が伸び難い
5.6　低い算数能力
5.7　集団における連帯意識と、横並びの文化（集団主義）
5.8　政府による教育現場への監督不行き届きと、著しい教育予算の低さ
第６章　結論と課題（要因のまとめと、導かれる打開策）
6.1　学校側に対応で可能なこと
6.2　村での対応策と、実現の可能性がありそうなもの
6.3　政府への要望
第７章　総論

論文の概要

まず、本論文の第1章では、研究にいたった背景と、目的および調査対象の選択と、その概要について述べた。

次に第2章では、パキスタンとギルギット・バルティスターン州（ＧＢ州）北方地域についての外観として、研究対象国のパキスタンが1947年にイギリスの植民地支配から分離独立し、建国の理念にはイスラーム教を支柱に据えたことを。そして国民の97％がイスラーム教徒であり、憲法ではイスラーム教を国教と定めていること。またパキスタンは主要4民族を統合して成り立っている多民族国家であり、その文化・社会環境や言語の異なる多民族を一つに結び付けているのがイスラームの精神であることなどを述べた。調査対象地域のＧＢ州は特にイスラーム色が強く、この「イスラーム」であることが多面的に影響していることを念頭に、住民たちがどのような社会的・宗教的背景で初等教育に向き合っているのかを調査した。さらには印パ分離独立後の60年以上を経た2009年になって、北方地域はＧＢ州として大統領令で格上げがなされ、ようやく初等教育に関してパキスタン本土と同列になったことなどを記述し、調査対象地域が後開発地域のままにあった背景が、教育の遅れにつながったことについて触れた。

続いて第3章ではパキスタンの教育における現状ということで、パキスタンの教育制度が元宗主国イギリス時代の制度をそのまま引き継いでおり、5＋3＋2＋2＋大学教育が一般的であること。パキスタン建国の精神（イスラーム）に基づき、公立、私立、半官（軍）半民の学校、全ての学校においてイスラーム学が必須であり、他の学科成績が優秀で合格していてもイスラーム学を落とすと進級できないことを。また、学年ごとの進級試験の合格点数は州によって若干異なるが、100点満点中34～35点であることを記述した。続けてパキスタンの公立学校と私立学校。ノンフォーマル教育（コミュニティ・スクール）と、イスラーム神学校(マドラッサ)や、初等教育を受け持つ教

員たちの資格などについても、先行研究を基にして概略を記述した。
　さらに、パキスタン教育の現状として全国の5～16歳までの子供5080万人の47％が教育を受けていないこと。また、初等教育に通う年齢の子供の約3分の1（28％）が学校へ行っておらず、初等教育における全国的な就学率が約70％のままで、小学校からの中退率も約40％に近いままにあるなど、パキスタンの教育事情が世界でも最下位に近いままである現実を述べた。そして就学率の推移については2008年に88.8%にまで上昇した就学率が2008年以降、微減し続け2012年には82.1％に、2015年まで横ばいのままである等をP.E.S 2014-2015の報告を基に記述した。そして、聞き取りやデータから見えて来る就学率低迷の要因を(1)テロによる脅威、(2)教員が学校にいないゴースト・ティチャー（幽霊教員）状態、(3)ゴースト・スクールによるもの、(4)2008年以降、教育予算が前政権の約半分、ＧＤＰ比の1.25％に落ちたこと等が考えられると、政府のデータや報道された記事などで捕捉をして述べた。
　こうしたパキスタン教育現状は最新の報告2016年でも、数々の例を挙げて「パキスタン教育の危機は巨大である」と結ばれている。この3章の中で取り上げたパキスタンにおける国家教育予算の少なさと、パキスタン（県）別、教育ランキングについては、パキスタン教育を俯瞰するうえでの一端になるだろうと考察した。

　以上、第3章ではパキスタン全体の教育現状について記述したので、第4章では調査対象地域のＧＢ州における教育現状について、ＧＢ州教育局発行のデータを基にＧＢ州内の各県別、就学率や修了率などについて詳述した。その次にはＧＢ州の教員たちの生徒指導に対する意識、教員の算数能力などを教員たちへの聞き取りと、テストなどから教員の出身宗派別に差異が見られることの大よそを把握して記述した。さらにイスラーム宗派の中では異端派とされているイスマーイール派の共同体には、旧守派からの批判は多いが、教育に対する取り組みには目を見張るべきものがあるので１項を設けた。また、4章の最後には2002年、ＧＢ州に初の総合大学が開設されて以来、地域住民の教育に対する意識が如何に変化をした（しつつあるか）を記述した。

　そして以上の第1章から第4章までを踏まえ、住民からの聞き取りを整理して第5章では、子供たちが初等教育を修了出来ない要因について述べた。まず、第一番目の大きな問題は、過疎・山村で現金収入の機会に恵まれず制服・文具などが用意出来ないことが大きな要因となっていることを。第二番目には学校や教員の不在。ゴースト・スクールやゴースト・ティチャー問題であるが、これは教員自身の怠慢やテロへの恐怖といった事柄と絡む部分も大きいことが判明した。そして三番目にはイスラーム厳格主義的な傾向と、根強い家父長制が自由な発想を抑圧し、教育への弊害になっていることを記述した。四番目の要因としては、女生徒は発育の過程で就学の継続に不可の山場が出て来ることを。その場合には、イスラームの教え・伝統的な考え方が女子教

育を阻むこともあるし、替えの制服がないことで学校へ行けないことがあることも明らかにした。五番目は多言語国家であることの弊害を述べた。特にＧＢ州北方地域は谷ごとに言語が変わり、さらに表音文字もないことが、学校で始めて習うウルドゥー語や英語への大きな障害となっており、母語で初等教育に臨めない（学べない）子供たちは国語力が伸び難いことを述べた。六番目としては教員そのものの能力の低さ、具体的には低い算数能力および指導力の欠如が挙げられた。さらに七番目としては、集団における連帯意識と、横並びの文化（集団主義）ともいえることが弊害になることの多さを。最後の八番目では政府による教育現場への監督不行き届きと、著しい教育予算の低さが挙げられると明記した。

このパキスタン政府の教育に対する姿勢、取り組み方こそがパキスタンの教育を阻み、向上させない最大の要因とも言える。

以上、第1章～第5章に述べたような事柄から、第6章では、要因のまとめと導かれる打開策として、学校側に対応で可能なこと。村での対応策と、実現の可能性がありそうなこと。政府への要望を記述した。そして、政府の取り組み以外の身近で導かれる打開策として、山村僻地でも地域女性の意識が変れば子供たちの学びにも興味が高じていくことを述べ、学校のない地域ではマスジッドを活用する案などを示した。

辺境地域で住民の教育に対する意識を変えるのには長い時間がかかる。マスジッドを中心にした当初の「学び」の場では、「神のご意思に添い賜うこと」を錦の御旗にして教育支援を展開すれば、厳格なイスラーム主義者たちも女性の「各種学び」に反対はし難い。そこからコミュニティ・スクールなどへの取り組みは段階的に時間をかけ、本格的な教育導入へといたるのが現実的であるなどを、35年に及ぶパキスタンやＧＢ州での経験から述べた。

ＧＢ州山村僻地に暮らす子供たちの教育環境と実態は悲惨であり、その問題に対する要因は極めて根深い。パキスタン全体の教育制度だけではなく、ＧＢ州の地理的要因による経済発展の遅れや、地政学的な要因による開発政策の遅れ、そしてイスラームの教え・伝統に強く依存した社会と慣習など、重層的な要因が初等教育を阻んでいる。それらを直ぐに解決でき、初等教育修了へと結びつけること出来ないし、また出来ることは限られている。

とはいえ、イスマーイール派の進歩的教育や、外部環境の変化の中で教育に新たな価値を見出していく人々も存在することは、教育現場への介入の価値と可能性も示している。パキスタンの教育問題に関しては課題も多いが、手を拱いているだけでは改善に至らない。

従って、困難な環境を前提として、外部からの教育支援をする場合の現実的な提案を本論文では試みた。